

ほっかいどう N I E 通信

Newspaper in Education



発行 北海道NIE推進協議会

〒065-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内

TEL 011-210-5802 FAX 011-210-5826

「新聞は優れた教材」

北海道NIEフォーラム開く

教育現場での新聞活用のあり方を考える「北海道NIEフォーラム」『生きる力』はぐくむ新聞活用(北海道NIE推進協議会、北海道新聞社主催)が10月28日、同社で開かれた。NIEを学校だけでなく家庭や地域社会にも広げようという目的で、この種の催しとしては初めて一般市民の参加も呼びかけ、教育関係者のほかPTA関係者、この運動に関心のある市民や新聞販売店主など120人が出席した。

実践発表やパネルディスカッションがあり、NIE活動に長年携わってきた教師らが「新聞は活用しだいで優れた教材になる」と熱っぽく語った。

谷田部玲生・国立教育政策研究所総括研究官が基調講演を行い、小中学生に対する過去の調査結果をもとに、新聞は勉強に役立つのかの質問で3

位(1位はテレビ、2位は本・雑誌)だったが、「情報の信頼性の高さ」では一位だったと指摘。「各紙を読み比べたり家族で一緒に読んで勉強したり、

方法はいろいろだが、調べて考え、分析、評価をする点で新聞は教育効果が高い」と述べた。次いで、NIEの活動歴16年という毛利慎晴・道立士別商業高教諭が実践発表と提言を行い、「新聞はタイムリーな教材として教科書の古い部分を埋めるために使っている。生徒とのコミュニケーションの手段としても有効だ」と強調した。さらに新聞の人生相談欄を利用して生徒に回答を書かせる実践活動を披露し、「身近な相談テーマが多いせいから、生徒はよく書いてくれるので文章力が身に付く。問題解決能力の向上や社会への関心を高めるのにも役立っている」と話した。

この中で上村教諭は「新聞を使った教育は、生きる力を子供たちの身に付けさせるためだけでなく、先生に実践していただく、新聞の持つ情報量の多さ、正確さ、奥の深さに気付いてほしい」と訴えた。

読書に親しむ心

10月、季節の変わり目が早く、藻岩山も先人は一灯火、秋を候い、家族で好きな本を1冊読むことを提案したい。週休2日に1冊の本を読みあかすの感想などを話し合うことができれば最高の幸せである。

「食べ物は体の糧、読書は心の糧」という名言がある。体を丈夫に育てるには食べ物、人間らしい心を育てるのは本ということである。島崎藤村の文章に「読まれたい本と並べた本は本場の墓場である」といふ本がある。眠って本を目覚めさせると、その本は外国や昔の時代、美しい森や湖に囲まれた世界、小鳥のさえずる田舎に誘い出される。読書で時代を超えた夢の世界を訪れたり、心の夢を遊ぶことも可能である。驚いたり悲しんだり怒ったり葛藤もあつたり胸打たれることもあつたり。良い世界が広がります。今でも鮮明に心に生き続けている本を2冊紹介しよう。「君たちはどう生きるか」(吉野源三郎)は自分の生き方についてヒントが与えられ、「家なき子」(エクス・メル・マロ)は不幸や貧しさにめげず力強く生きていく姿から、生きることの大切さを学んだ。

新聞活用を通じて、子供たちの「生きる力」を育成していきたい。このことはNIE実践者には自明の理だろう。しかし、いきなりある紙面を提供し展開しても、すぐに資質が磨かれ能力が向上するものではない。やり方によっては逆作用の危険さえある。新聞活用にあたっては、最終目標である生きる力を育てるための「前段階」としての基礎基本の実践を忘れてはならない。



新聞活用の基本的実践を

北海道新聞教育研究会会長 遠藤 紘之助

トップ見出しは「読む・書く・考える」だったが、これらが新聞活用のまさに基礎なのである。幼児の文字の覚え方を思い出し、文字の読みとることから始まり、やがて、その文

字が書けるようになる。イギリスでは低学年での新聞活用として、紙面からアルファベットを拾い出す授業の例があるが、それがまさに活用の基本なのである。もちろん、

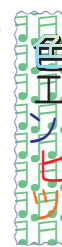
実践してきた。第1段階は中学1年生を対象に、新聞を読みとるための「書き取り」から始める。そこで、ニュースノートを各自に持たせる。ノートはメモ

帳程度で十分だ。毎日の朝夕刊の中から自分の目に留まった記事をノートに書き取らせる。書き取ったが、読めない文字が出てくれば、辞書を引くなり親に聞いたりしてふりがなをつけてくる。1年を通して習慣付けると、多くの子供たちに定着していく。

第2段階として、2年生になると本格的な「読み取り」に入る。記事を読み、内容を要約してノートに記録し、発表させる。これによって記事を選択し、自分なりのことばで表現するという技能や資質が身に付いてくる。最終の第3段階では3年生に、自分で読み取った記事について考えや感想をノートに記してもら

う。これは自分で考え、判断し、自分そのものを表現するという、いわば「生きる力」の基礎基本を育成することにつながる。記録されたノートは学期ごとに提出させ、評価しコメントをつけて返却する。この実践を3年間続けるには大変な努力がいるが、そうした過程で親子の会話が豊かになったという保護者の声も聞いた。

「先生、今でもニュースノートやってるの?」と尋ねられる。これこそ、ひとつの資質が大人になっても間違いなく身に付いている証だろうと思う。(札幌市立上野幌中学校 校長)



熱心に討議するパネリストたち



「情報を大切に作る気持ち」育てたい

NIE活動と出会ったのは、今から5年前になります。当時は国語科の研究を行っていた。豊かに表現する子ども「自ら考え・判断し・実践する子ども」を目指していましたが、児童の実態は「伝えたい」という一語だけで済ませてしまふ「俗にいう単語族ばかりです。会話など成り立っていませんでした。もちろん、このような状態です。



美幌小学校教諭

鈴木

孝子

は新聞の漢字を読めない難しさもありました。しかしNEWSの語源や新聞が本来持っている素晴らしさ、居ながらにして全国各地の情報を得ることができ

も現れ、「新聞はあらゆるジャンルの情報源」と見られ始めたのです。この取り組みは国語科以外でも取り入れていきました。理科で「気温の変化と天気」や「月と太陽」の学習時間中は、新聞の天気欄や天気図を学習教材とし、道徳や学級活動(朝の会)などでは読者の声欄やコラム欄を利用しました。

なってきました。新学習指導要領の実施で総合的な学習の時間が本格的に始まりました。児童自らの「なぜ? どうして? という疑問(課題設定)」と課題解決へのプロセスが重要視されています。子どもたちはたくさん資料を集めようとして懸命です。インターネットによる情報収集は当たり前の子どものたちです。膨大な情報に右往左往しています。その中にあって、活字に慣れ親しみ、毎日の情報を大切にする気持ちを持って、新聞の中にある「わくわくドキドキ」を少しでも伝えることができれば、と思っています。

「伝えたい」という一語だけで済ませてしまふ「俗にいう単語族ばかりです。会話など成り立っていませんでした。もちろん、このような状態です。

を知りました。活字離れが激しいといわれる子どもたちに、新聞を学習教材として活用できるのか、不安がありました。小学生に

ことなどを教え、朝の会で日直が「気になる新聞記事」の発表を継続して行いました。この結果、教室に朝、運ばれる新聞を楽しみにしていてくれる子ども

こうして5年間の実践を重ねていくうちに、リアルタイムに報道される新聞記事を題材にして、「情報を生かす力を養い、自分の生活の中で日常的に活用すること」ができるまでに

を伝える新聞を使えば、作文なんてあつという間に書けるようになる」と強調した。

今、なぜ新聞活用か

フォーラムで熱っぽく討論

「子供たちの感性を引き出し、その世界を広げてあげたい」―28日開かれた北海道NIEフォーラムのパネルディスカッションで、NIEのベテラン教師たちは自らの体験をもとに新聞活用の優位性を熱っぽく語った。メディアが多様化する中で、なぜ新聞にこだわるのか。鹿野川喜代美・福生第1中教諭は「イラク戦争や米国中核テロの時、テレビにショックングな映像が流れた。でも『なぜ』が分からない。

やはり新聞で確かめねばならない」という。さらに「新聞記者とかかわりを通じ、アフガニスタンの子供たちに絵手紙を届けることができた。その絵手紙を子供たちが大喜びで抱きしめる写真が学校に届き、『平和を願う31文字のメッセージ』を書かせたら、茶髪でピアスをしているような子が『写真見て、地雷の怖さ身にしてみてもできない、自分に悲し』と書いてくれた。『今』

を伝える新聞を使えば、作文なんてあつという間に書けるようになる」と強調した。

第14回十勝新聞教育研究大会帯広大会が10月20日、帯広市内の帯広第5中で開かれ、NIEに関心をもち十勝地方の小中学校教諭ら約110人が、公開授業などを通じ、新聞を授業にどう活用していくかについて学んだ。

授業後、参加教諭らは授業の良かった点や改善できる点などを指摘し合い、新聞を使ったよりよい授業のあり方について理解を深めた。このあと「新聞づくり講習会」も開かれ、帯広市立柏小の平岡あゆみ教諭が壁新聞づくりのポイントなどを発表した。

十勝新聞研究大会 開く

がある。やっている教師が学校の中で孤立しないよう、その差を埋めていくことが必要(毛利慎晴教諭)。「各校それぞれの教育課程のなかに新聞活用を位置づけたい。そのうえで教師間で活用の狙い、目的について共通理解を持つことが大切だ」(上村教諭)。「現代は便利なもの、早いもの、易しいものを追い求め過ぎて、人の意見を聞くとか調べるとか、そういう地味なことを面倒がる時代になった。今こそ踏ん

張って、それらをていねいに教えていきたい」(鹿野川教諭)などの意見が出された。

実践校
ルポ

東海大第四高校中等部

歴史、地理でユニーク授業

初めて目にする江戸時代の新聞「かわら版」。これを通じてこの時代の庶民の暮らしに触れ、現代の新聞との違いを学ぶ。新聞に載った紀行文を読んで遠い国々に思いをはせる。今回は昨年度から2年間、NIE実践指定校として実践活動が続けている東海大第四高付属中等部(札幌市南区)のユニークな授業ぶりを紹介しよう。

(北海道新聞NIEスタッフ・江本 麻貴)

「かわら版」をつくる

工藤優樹教諭(31)が手がける2年B組の「歴史の時間」。生徒たちに市販のCD-ROMから印刷紙にプリントした「かわら版」のコピーが配られた。江戸時代についてのは先日の歴史の時間に学習した。かわら版の文字はほとんど解読不能だが、生徒たちは挿し絵などから想像を膨らませ、どんな内容が考えられる。

一方、同じ日、1年B組の地理の時間。工藤先生は北海道新聞日曜版に連載されている企画「地球体験紀行」を資料として活用した。生徒たちはそれぞれの企画の一部を読み、取り上げられた国の位置、人口、主な産業などを調べ、どんな印象を持ったかの感想も含めてノートに書き入れた。



どんな内容の記事だろう?話し合う生徒たち

「博多祇園山笠祭り」(8月17日掲載)を選

んだ橋本佳介君は「男たちが大事な祭りの伝統を築いてきたことが分かった。体が小さいけど、ボクもおみこしを担いでみたい」と話してくれた。

取り上げたのは今井梨紗さん。「ハワイの車のナンバープレートには虹(にじ)が描かれている」という話を思い出した。一番行ってみたい国ハワイで虹を見たい」という。この日の授業で紀行文に触れ、このあと「家か

学級新聞づくり支援

室蘭民報のNIE活動

室蘭民報が「室蘭地方小中学生新聞コンクール」を始めて今年で18年目になる。今回も約30の小中学校から70点を越える学級新聞の応募があった。10月17日に審査、展示写真Ⅱが始まり、19日に講評と表彰が行われた。11月には室蘭民報で特集掲載する。

「校内予選」を実施している。教諭が基本的なレイアウトを教え、2年、3年と応用が進む。最近はこの学校もレイアウト手法やビジュアル紙面で差が少なくなり、記事

児童・生徒が新聞社を訪問し、実際の取材体験なども行っている。学校側は新聞づくりを「総合的な学習」の一環と位置づけており、企画テーマの設定、取材、執筆、レイアウトなど取り

28日に全道NIE研究会

第8回北海道NIE研究会兼第13回北海道新聞教育研究大会(北海道NIE推進協議会、北海道新聞教育研究会主催)が11月28日、札幌市西岡北中学校で開かれる。NIE活動や学校新聞づくりについて研究成果を発表し、実践を深める催しだ。

大会の研究主題は「生きる力」と「自ら考える力」を培う新聞教育。午後1時から参加を受け付け、同1時45分から公開授業。同校の豊島義明教



方「レイアウト手法」について指導を依頼されることが多い。そのつど整理部門や出稿デスクが学校へ出向き、「講義」する。教師向け講座もある。

ら学校までの行き帰りのなかで」をテーマにそれぞれ紀行文に挑戦する。紀行文に親しみをもち、もうことが授業の狙いだ。生徒たちは紀行文を書くことで、赤や黄色に彩られた通学路で何か新しい発見をするだろう。

組み方法には年々、変化が見られる。記者・デスクの「出前講座」も職業体験や時事問題の解説学習などにも及んでいる。「新聞記者として一番の喜びは」一番つらいことは「などと、こちら側が試される質問もぶつけられる。

今春から、教育取材を強化している。教育特集欄も週2回として学校をめぐると、地域の教育課題、読書やボランティアに関する寄稿など多彩な取り上げ方をしている。「地域教育を強化する」という基本姿勢で取材・編集活動を強め、「総合的なNIE活動」を推進したいと思う。

(室蘭民報社常務取締役編集局長・工藤 志)

論が「新聞から見つけた環境問題」(2年生選択理科)、同市幌西小の斉藤拓也教諭が「病気の予防のための生活の仕方」(食育の立場から)、「6年生保健分野」をテーマに授業する。

802)へ。

父母が「壁新聞」づくり

別海・上西春別中 主力はお母さん？

根室管内別海町の上西春別中(生徒数94人)を10月初めに訪ねた。同校では昨年、生徒と競い合うように父母が年に1度、我が子のクラスごとに壁新聞を作る試みを始めた、と耳にしたからだ。NIE運動は今、家庭や地域を巻き込むことの重要性に気付きつつある。いわゆる「ファミリーフーカス」だ。同校での試みはまさにこれ。もっとも、当事者の父母にとって、NIEなどの「業界用語」はほとんど初耳だったようだ。

(北海道新聞NIE推進センター委員・阪井 宏)

午後7時半。次々に父母たちが学校に集まり始めた。ジャージー姿のお父さん。食事の用意もそこそこに駆けつけたお母さん。この日はPTA理

事会の日で、テーマは昨年同様、壁新聞づくりに取り組むか否か。30人が音楽室に集まり、話し合いが始まった。すんなり全員一致で

「ゴー」となるわけではない。特定の父母に負担がかかることへの不満が出た。考え込む役員。やがて重苦しい沈黙を破ったのは、自衛隊駐屯地に勤務する父親の一言。「みんなでやれる範囲でやりましょう。1日でもいいから必ず全家庭が参加することにしませんか」。話し

合いは今年も新聞を作る方向で動き出した。

「父母が新聞を作るようになったのは、実は学校の荒廃があつたんです」。理事会のあと、焼き鳥屋で役員の1人が打ち明けた。校長が「家庭も学校と一緒にやって子供たちを育てましょう」と呼びかけ、PTA有志らが立ち上がったのがきっかけだったという。画期的な取り組みにはこんな背景があつたのを知り、うれしくなった。

PTA会長尾藤是督さんは「壁新聞ではいつもお母さんがたに助けられている。われわれオヤジ連中は校長室で無駄話ばかりで、さっぱり記事が書けなくて」とこぼす。父親の1人が「子供には壁新聞コンクールがあるけど、おれたちの新聞は作って終わりだもなあ」とぼやいたが、「なんもさ作ればうまい酒が飲める」という酪農家の一言にどっと笑いが起きた。

NIEといった業界用語を振り回す父母はここにはだれもない。それでいて、全国のどのNIE先進地にも負けない実践がたくましく育ちはじめている、と強く感じた。

お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなが協力して壁新聞を作っています。壁新聞は、学校の先生、お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなが協力して作っています。

編集後記

「北海道NIEフォーラム」は参加者から概ね好評でしたが、本州各地でもこの種の催しが活発に進められています。この中で昨今、目を引いたのは8月下旬に大阪市で開かれた「近畿NIEフォーラム」。目玉は12組の親子が新聞を読み勉強する「ファミリーフーカス」公開授業でした。

同市内の中学校女性教諭が「ぶぶんぶぶんしんぶんし」という絵本を読み聞かせ、その内容を

学校現場からの投稿を歓迎します。NIE関連のほかに学校経営や児童生徒の指導、父母地域の話題などについて400字前後にまとめてください。学校名を含め原則実名としませんが、希望により匿名可。ただし原稿にはお名前と年齢、住所、電話番号を明記してください。採用分には2千円の図書カードを贈ります。宛先は〒065-0871 札幌市中央区大通西3-6北海道新聞社内、北海道NIE推進協議会事務局(電話011-221-5802、FAX011-210-5826)。フロッピー処理して送ってください。

△原稿を募集します▽



父母が作った壁新聞の出来映えは一。親と子が一体となって話し合い

新聞づくりに補助教材

日本新聞教育文化財団(横浜市)は、児童・生徒向け補助教材「わくわくNIE」第7号写真IIを希望する小中高校に送料(700円)のみで配布する。タブロイド判オールカラー8ページで、「取材・撮影・原稿の書き方のコツ」など、新聞づくりに役立つ情報を満載している。希望者多数の

希望校に追加配布



ため増刷した。
希望部数(1000部単

位、500部まで、学校名、学校の住所、電話番号、ファクス番号、申し込み責任者名を郵便振替用紙の通信欄に記入し、同財団の郵便口座(001200・544317、新聞教育文化財団NIE係)に送料を振り込む。締め切りは11月15日。問い合わせは同財団NIE部(045・661・2031)。